

昭和 19 年 10 月 1 日 日 曜

機密 改 録 日 誌

一、大島島長 玉碎 田村 参謀長 御遺族ヲ弔問ス
(班長 橋本 稻葉 水原)

247

0208

昭和 19 年 10 月 2 日 月

一
九
月
中
A、B、C、船ノ損耗概況左ノ如シ
沈没 三六、六万丸
損傷 一三、八万丸
計 五〇、五万丸

0209

昭和 19 年 10 月 3 日 火 曜

機 密 載 録 日 誌

一、芬対日断交に伴い駐芬蘭公使一行の行動に因り
 ソノ經由歸朝方交渉中、所本日ソノ側ヨリ許可シ
 来リ、ソノ態度面白シ。

二、京漢鉄道ハ来ル五日南北連接スルニトナレリ。

三、最近、輿論指導上注意ス（キ点左ノ如シ）

一、決戦ナル言葉ヲ威ニ使用シ、決戦成果ニ大ナル
 期待ヲ斯ルル如キハ失敗セル場合、為、注意ヲ要ス
 只最近觀念的必勝論、合理的敗戦論、横行シ
 アリテ注意ヲ要ス。

四、次長ヨリ各部課長ニ対シ、津野田少佐事件ノ
 経緯ヲ説明シ注意ヲ喚起セラル。

昭和 19 年 10 月 4 日 水曜

一日満支燃料自給対策ニ関シ省部主務者於テ
研究セル所(燃料課案)
今後ノ努力如何ニ依リテ昭和十九年度航揮約七〇万
吨強(五十万屯強アルニシテ)ノ自給可能ナリ。
之カ為ニ鋼材約三万屯・銅七、〇〇〇屯・コバルト八屯
ヲ要シ農産物ニ優先取得ノ要アリ。
而シテ本件達成ノ為ニ最大ノ隘路ニ輸送力減ニ
伴フ石炭ノ逼迫ニシテ。今ヤ石炭問題ノ解決ハ
燃料自給ノ面ヨリスルモ喫緊ノ要事ニシテ十月以降
A. B. 南方向輸送ヲ原則トシテ中止シ、最小限
ニヨリ三〇万屯ノ船腹ヲ日満支ニ配船スルコトニ依リ
可能ナリ。

0211

昭和 19 年 10 月 5 日 木 曜

機 密 戦 略 日 誌

一、捷号作戰ノ人的優先ヲ期スル為、陸大學生ヲ速カニ卒業セシメ之ヲ充當スルヲ要ストノ意見、補任課長ヨリ班長ニ話アリ、班長ニ次長ニ具申セリ。

二、太平洋基地ヨリスル敵本土空襲ノ切迫、微濃化シタルヲ省部、業務者ニ於テ之カ対策ヲ懇談ス。

軍防空兵力中、飛行機ハ捷号準備發動ニ伴ヒ其ノ勢力ハ概シテ減シタル矣情ニ鑑ミ、今後之カ補足対策就中民防空ニ力点ヲ指シタルヲ要ス。但シ現政府ノ指導力ヲ以テシテハ現在以上強力ナル防空対策ノ推進ハ困難ナリトノ結論ナリ。

三、十四時ヨリ第三十回最高戦争指導會議ヲ開催シ

昭和 19 年 月 日 曜

「決戦輿論指導要綱」ニ関シ政府側ヨリ報告ス
右要綱中華人遺棄族ノ取扱ニ関スル件ハ次長ノ
意見ニ依リ特ニ復活セラレタルモノナリ。
次ニ情報局總裁ヨリ
敵側思想謀略破権方策及対敵宣傳方策ニ
関スル情報局(案)ノ説明アリ。
四本目 田中中佐、クワレルヨリ無事歸任。

0213

昭和 19 年 10 月 6 日 金 曜

機密 戦 時 日 誌

一、頭山満翁九十才、高齢ニテ逝去

明治、大正、昭和三代、直ル在野ノ志士、遂ニ逝ク。

二、第三、四半期物動暫定実施計画ニ関シ、戦備課ヨリ説明

ヲ受ク。概括ニテ、第三、四半期ニ比シ七〇—五〇%、国力ナリ。

最大隘路ハ石炭不足ニシテ、最底需要ニ比シ一四〇万ト

減ナリ。速急ニ対策ヲ講スルノ要アリ。

三、佛印ノ状況ニ関シ、河村參謀長ノ報告アリ。

①現佛印政權ハ佛印ヲ戰禍ヨリ温存スル方針ヲ堅持シアリ。

②佛印軍ノ現兵力ハ約一〇万。素質ハ不良ナリ。但シ対日警戒ハ嚴

以、佛印ト「トゴール」派トノ連絡ハアルモノ、如シ。

③重慶ト政治的密絡ノ首腦部ニナシ。但シ対米関心ハ頗ル強

昭和 19 年 10 月 7 日 土 曜

- 一 九時ヨリ昨日ニ引續キ对佛措置決定ノ経緯ノ関シ河村參謀長ト懇談アリ。
 - 二 村田中佐南方防衛関係視察報告アリ。
ハ、スモトラ防衛関係部隊ノ指揮隷屬系統複雑ニテ目下委員会組織ニテ実行中ナリ。
 - 三 ハレンバンニ於ケルAA不足ナリ。又警戒機ハ著シク不足ニシテ四時間連続作動シテラス。
 - 四 北スモトラ製油所防衛不可ナリ。
 - 五 ハンシ河内鎖ル場合、補助輸送路ヲ各種研究スルト共ニ昭南貯油所危険ナル場合、洋上補給ヲ各種研究ニテ考慮ノ要アリ。
- 三 第一部長比島視察報告要旨。

0215

1. 比島空襲被害ハ陸軍ノミテ五三〇機(内戦機三〇機
一三〇機ハ修理可能)奇襲セラルル原因ハ見張リ
通信連絡不十分ニシテ遊撃ヲ回避ニ専念セル為ナリ
空母攻撃ノ奇襲スルヲ要ス
十月十五日ニハ概不旧機数ニ恢復ス(現在270機ナリ)
2. 海軍ノ飛行機補給状況ハ著シク不良ニシテ途中
故障多シ、基地補給ニ慣熟シテラレ為ナリ。
3. 電波警戒機ハ十月二十日迄ニ概成予定ナリ。
4. 航空作戦情報ハ陸海軍共ニ44A(集中ニ定質的ニ
比島航空陸海一体ナリ)。
5. 陸海航空部隊対スル地上部隊ノ協力不十分ナリ。

昭和 19 年 月 日 曜

6. 總長ヨリ IHA カゴビニラシニ位置スル意味アリヤ
ホルネオレヲ録下ニ入レテ如何
四. 燃料還送量ハ第三四半期ニロ万斤、第四四半期ニロ万斤
トスルフトニ主務間ノ意見一致セリ

0217

昭和 19 年 10 月 8 日 日 曜

機 密 戦 争 日 誌

一 第五航空軍、昨夜成都飛行場ニ集結中、B-29ニ対シ
先制急襲中。

252

0218

昭和十九年十月九日 曜

一、昭和二十年度航空機生産機数ニ関スル件ヲ、省部
主務者間ニ於テ協議ス
軍需省航空兵器總局案ニ依リ、總機数三三〇〇機
(内六六〇機ハ試作機)ナリ、本生産目標達成ニ爲
アルミ特殊鋼等原料面ニ於テハ無理ナリ、
右ニ對シ統帥部及航本ハ四五機目標ヲ固執、陸軍
省ハ取り敢ヘズ發足スル為ニ、軍需省案ヲ可トスル
意見ナリ、
航空機ノ生産ハ國力ヲ基調トス(キニ付、昭和二十年
度國力見透ヲツケ、今後決定スルヲ必要トス
現狀ニ於テ議論スルモ基礎ナシ、
ニ米國「ウイスキー」死亡ス

0219

昭和 19 年 10 月 10 日 火曜

機密 戦 日 誌

一 本朝來沖繩、宮子島等琉球列島ニ對シ敵艦載機
來襲中ナリ。敵機動部隊出現ス
來襲機數延ハ三口機（五次）

二 二ノ軍「ハンガリー」首都「ベルグラード」ノ七口料ニ近迫ス。
同國ノ去就モ特機ノ問題ナルヘシ。

三 京漢鐵道本日駐馬店ニ於テ打通完了セリ。

釜山—奉天—漢口三五口料ノ大陸幹線鐵道並ニ貫ス

四 南方軍總司令部「サイゴン」ニ移駐決定ス

一 捷多作戰先遂ノ為

二 捷多作戰未後於ケル南方全般作戰統帥ノ為

五 五ノ「ヤール」イデーデン陸海軍幕僚ヲ帶同シテ「モスコー」ニ至リ

「スターリン」ト合談ス

昭和 19 年 10 月 11 日 水曜

一、硫球東方海面ニ現出セル機動部隊ハ敵ノ主力ヲ力
如ク次テ台湾、比島方面へ南下ノ算ナリ
昨日ノ戦果 撃墜 20 機、船舶 九隻撃沈
二、B-29 約 10 機支那ニ集結中ナリ

0221

昭和 19 年 10 月 12 日 木 曜

一 本朝来台湾全島ニ敵機來襲中ナリ延二三ロ機
 二十四時ヨリ第三ニ回最高戦争指導会議ヲ開催ス
 國內防衛方策要綱ヲ報告ス
 席上大規模疎用実施ノ可否・就テ議論アリタルモ必要
 最小限疎用ニ実施スルコトトシ細部ニ政府ニ於テ
 内務大臣ト話合フコトトセリ
 次テ御勅語御親拝問題ニ就テ話合アリ
 總理ヨリ勅語案ヲ發言シ海軍大臣賛成セルモ
 杉山大臣ヨリ勅語ハ議會ニ地方長官會議ニ於テモ
 屢アリタルヲ以テ御親拝ヲ可トス軍令部總長ハ
 御親拝案 梅津總長ハ何レモ可
 結局 本件ハ御上ノ行事ナルヲ以テ本日より發言ハ

昭和 19 年 月 日 曜

個人ノ意見トシテ次回研究スルストナレリ
次ヲ米内海軍大臣ヨリ対重慶工作ハ發動以來一ヶ月
志モ成果如何トハ質問アリ
總理ヨリ何等反應ナキ旨應答セリ

0223

昭和 19 年 10 月 3 日 金 曜

機 密 載 入 日 誌

一 三 年 度 甲 造 船 計 画 建 造 方 針 之 関 于 省 部 主 務 者
 間 于 海 軍 所 部 中 佐 等 海 軍 案 之 説 明 ヲ 聽 取 ス
 一 施 設 能 力 二 五 〇 万 吨
 〇 勞 務 面 于 現 狀 ヲ 維 持 せ ば 二 〇 〇 万 吨
 〇 資 材 面 于 一 三 〇 〇 一 一 四 〇 万 吨
 一 應 目 標 二 八 〇 万 吨 ト シ テ 船 型 二 突 込 速 力 決 定 ス ル 事
 コ ト ト ス
 二 本 日 七 台 湾 空 襲 七 元 延 一 四 〇 〇 機 戦 果 数 陸 三 十 三 機

昭和 19 年 10 月 17 日 土 曜

二十日夜、台湾東方海域敵機動部隊ニ対スル海軍
攻撃ノ戦果中、本日迄ニ判明セルモノ左ノ如シ、
第一次 四隻(丙空母三轟撃沈外ニ炎上ニ隻)
第二次 戦果確認セズ(陸軍航空主体)
十三日昼間攻撃ヲ企圖セルニ天候不良ノ為中止セリ
ニ比島独立一週年記念日ナリ。
ニ台湾戒嚴令施行ノ件ニ関シ台湾軍ニ意見ヲ
徴シタル所 現地ニ於テ其ノ必要ヲ認めテラス。

0225

昭和 19 年 10 月 15 日 曜

機密 戦報 日誌

一 本日迄ニ判明セラル戦果左ノ如シ

十二日 轟撃沈 6 | 8 (内制式 3 | 4)

十三日 " 3 | 5 (" 2 | 3)

計 " 9 | 13 (" 5 | 7)

外ニ艦型不詳十数隻撃破

右戦果ハ昨十四日及本日更ニ攻撃ヲ反復中ニシテ

擴大ノ算大ナリ。ガ島以來二年目快報ニシテ將ニ

世界戦史ニ其類例ヲ見ス。帝國ノ戦争先遂ニ

対スル自信ヲ強化セラルト謂フヘク誠ニ慶賀ニ

堪ヘス。昨日第一次攻撃ニ於テ大型空母一ニ

直撃弾ヲ與ヘ大傾斜ヲ生セシム

昭和 19 年 10 月 16 日 月 曜

- 一昨日陸軍第九十八戦隊(二五機)攻撃に依り左戦果ヲ
擧ケタリ。
空母三(大型一、小型二)戦艦一、巡洋艦ニヲ轟撃ヲ沈セリ。
陸軍雷撃機ノ初陣トシテ此ノ赫々タル戦果ハ將ニ空前
絶後ナリ。
- 二昨日再ヒ50機ヲ以テ「マニラ」ヲ空襲セリ。戦果15機撃墜
- 三昨日比島周辺ニ近接セル敵機動部隊ハA四隻ヲ基幹
トシ我カ陸海軍機ハ之ヲ攻撃シテ左ノ戦果ヲ得タリ。
大型A一重撃沈、A二撃破、A一至近彈、C一撃破、
- 四海軍ヨリ艦隊追撃作戰ヲ為シ「カニカ」ニ度ノ使用申出アリ。
- 五船舶ヨリ視覚照和二十年度國力検討ニ関シ十課案ノ
説明ヲ聴取ス。
- 六昨夜「カニカ」代表対シテ和平ヲ提案セルカ如シ。

0227

昭和 19 年 10 月 17 日 火 曜

機 密 減 筆 日 誌

一. 所出撃為「タンカー」ニ復ノ使用ノ件決定ス。
二. 比島「イテ」島東方ノ小島ニ敵上陸ノ報アリ。
三. 本日第一部ノ遠來会ヲ実施ス。

257

0228

昭和 19 年 10 月 18 日 水 曜

一昨十七日十時五分敵機動部隊が「ニコバル」に現出セリ。
ニ「イテ」島東方小島（「スル」島）ニ対スル敵上陸の事実は
ナルカ如シ

本日捷二号作戦發動セラル

右上奏ノ際西總長ニ対シ御上ヨリ左記要旨ノ
御言葉ヲ賜ハル

「本國ノ作戰ニ皇國ノ興廢ヲ決スル重要ナル戰鬥ナリ、

宜シク陸海軍ニ一體トナリ滅敵ニ邁進セヨ」

三先般來沖繩、台湾ニ於ケル船舶ノ空襲被害綜合
左ノ如シ。

沖繩 大型船一〇隻沈没、小型及大小發五五隻沈没
台湾 沈没九隻、損傷七隻

0229

昭和 19 年 月 日 曜

機密 戦時 日誌

四、十二日以来台湾ニ出張セル B-29 180機ナリ。
 五、対重慶作ノ進展振リニ対シ國民政府最高顧問
 矢崎中將ヨリ左記要旨ノ報告アリ。
 (一)周佛海ハ使者ハ明年一月頃帰ル予定ナリ。
 (二)使者ハ自己本位ノ人物ナルヲ以テ先ツ成功自途ナシ。
 (三)今後ノ方法トシテハ中立國利用以外ニ名案ナシトノ
 意見ナリ。

昭和 19 年 10 月 19 日 木 曜

一昨夜軍令部ヨリ捷一号ノ發動ニ伴フGH出撃作戦
為油槽船六隻ノ使用ヲ申出タリ(新四隻追加)
GH作戦ノ骨幹名(キ油槽船問題ヲ作戦發動後ニ於テ
切り出シタル海軍ノ非常識モサルコトナカラ純然名
計重作戦タル捷号ノ作戦構想決定ニ當リ、兩作戦
當事者間ニ於テ事務的ニ検討シテサリ事ハ一大
手落ナリ、
陸海空一体トナリテ決戦ヲ指導セントスル本作戦ニ
於テGH作戦行動如何ニ関シ、陸軍統帥部カ何等
知ルコト無キ実情、真ニ遺憾至極ト謂フ(ヘリ、後世
史家ノ捷号研究時ニ於テ最大ノ批判ヲナス(キ点ナリ、
而シテ右GHノ要望通り追加四隻ノ使用ヲ認ムル場合於テ

0231

第三四半期燃料還送三千万斤是ハ米減シ先般来
 省部主務者間ニ於テ苦心滲漉ノ結果一脈ノ光明ヲ
 認メル燃料自給方策ニ根底ヨリ覆リ捷号以後於ケ
 ル全般戦争ニ致命的打撃ヲ与フルニ至ルヘシ
 斯カル危険ノ下ニ所出敵ヲ作戰ノ自途如何
 吾人ノ戰略常識ヲ以テセハ奇蹟ノ存セサル限リ現情於ケル
 水上艦艇ノ行動ハ不可能ニシテ徒ラニ敵ノ志氣ヲ鼓舞
 スル以外ニ何物モナシ若シ海軍傳來ノ面目ヲ維持セザカ為
 敢テ此ノ暴舉ヲ出スルエトテ固執セシカ真ニ海軍ハ
 海軍ノミニ存スルアリテ國家ナシトノ惡評ヲ受クルモ亦
 至當ト謂フヘシ帝國陸軍トシテハ大東亞戦争先遂ノ
 大局的見地ニ基キテ断乎海軍ヲ翻意セシムルヲ要ス

三本日「タクロビン」及「ロイテ」島南岸ニ敵上陸ヲ開始セリ
更ニ「ミンダオ」東方海上ニ敵大船團アリ。
此日戰場天候悪ク我カ航空機出撃ヲ不可能ナリ。
三本日十四時ヨリ第三十三回最高戦争指導會議ヲ開催ス
先ツ「液体燃料確保対策」ニ関スル件ヲ議題トシテ海軍
軍務局長ヨリ説明シ、全員異議ナシ。内容中「生産
目標ヲ努力目標ニ改メ、軍需大臣及農商大臣、總理
ヨリ協議」上、次回會議ニ決定スルコト、セラレタリ。
（海軍側ノ態度ハ油槽船問題ト関聯シ極メ不可成）
次テ矢崎顧問ヨリ重慶存ノ報告アリ、總理ヨリ
他ニ方法無キヤト、質問ニ対シ、重光外相ハ極メテ困難ナリ
ト、應答アリタル後、幹事ニ於テ一案ヲ研究スルコトセリ。

昭和 19 年 10 月 20 日 金 曜

機 密 戦 争 日 誌

二捷号作戦發令時 御上ヨリ兩總長ニ対シ

「皇國・興廢ヲ決スヘキ重大な戦ヒタルヲ以テ、陸海眞ニ一体トナリテ敵撃ヲ滅シ邁進セヨ」

トノ主旨ノ有難キ御言葉ヲ賜ハレリ。

ニ油槽船徴備問題ニ関シ作戦課ノ意見トシテ服部大佐ヨリ班長ニ対シ左記返答アリ。

「西軍政當局ニ於テ異存ナラハ作戦的ニ異存ナシ」

三敵「ニバル」ノ「テレッサ」島ニ本一時間分上陸ヲ開始セリノ報告アリ（後誤報ト判明）

四油槽船徴備ニ関シ陸軍トシテ左記ノ條件トシテ同意ス

1. A及Cニ対シ内地ニ於テ重油各一五万斤ヲ補填ノコト

IKDF

- 7S (Ca) 熊野 鈴谷 利根 筑摩
- 5S (Ca) 妙高 羽黑
- 4S (Ca) 鳥海 摩耶 愛宕 高雄
- 3S (B) 榛名 金剛
- 2S (B) 山城 扶桑
- 1S (B) 大和 武蔵 長門

- 16S 青葉 鬼怒 dx1
- 10S Cox1 dx10
- 2Sd Cox1 dx10

最上

2. 第一遊撃隊 リンカーブルネーイテイテ湾 (二十四-五日著)

五. 海軍出撃ノ作戰構想左ノ如シ。
 1. 機動部隊本部 瀬戸内出航 (二十三日朝比島附近著)
 兵力母艦(改装田中五〇機) D九隻

0. 解散ヲシテ、昭南著ヲ極力促進スルコト
 1. 他ノ「タンカー」船團ノ護衛ニ支障ヲ與ヘサルコト
 2. 最高會議ニ於テ決定ニシト

昭和 19 年 月 日 曜

機密 戦 争 日 誌

3. 第二遊撃隊 二十日馬公發
 二十四日朝「ライテ」灣着
 454 2/5 那智 足柄 CX1 dx7
 (Y+L) 伊勢 日向

261

0236

昭和 19 年 10 月 21 日 土 曜

一本日、アール、ハイン、米軍に占領せられ
比島作戦使用に得ル陸海軍航空兵力(計画)左如シ

陸軍 戦斗 三二〇機

重爆 二七二機
双軽 二七二機
襲撃 二七二機

司偵 二四機

2FA 三四〇機

1FA 五四機

機動 一五〇機

六一六機

五四〇機

三十時ヨリ第三十四回最高戦争指導会議ヲ開キ
「油槽船使用ニ関スル件」決定ス(列紙)
四本日陸海軍ニ御勅語ヲ賜フ

0237

昭和 19 年 10 月 22 日 日 曜

特記事項
ナシ

機密
戦争
日記

262

0238

昭和 19 年 10 月 23 日 月 曜

一 靖國神社臨時大祭
二 本日 班 全 員 高 雄 山 二 秋 季 鍛 練 行 了。

0239

昭和 19 年 10 月 24 日 火 曜

機密 戦 争 日 誌

一、二十日夜迄ニ判明セルレイテ、湾ノ状況左ノ如シ。
ハロ附近一師団半、計三ヶ師団上陸。
ドラック附近一師団半、
今次作戦ニ参加セル敵ノ航空機ハ巡改16—20隻。
二、西歐戦場ニ於テハ、ソノ軍東プロシヤニ三口ヲ進入シ、
ブビンノン附近ニ於テ独ソノ兩軍交戦中ナリ。
三、対重慶作ニ関シニ幹事協議ノ結果左ノ如ク意見
一致セリ。
1. 帝國政府直接実施スルハ不可ナリ。
2. 矢崎軍事顧問ヲ責任者トス。
3. 第三國ヲ利用スルハ不可(外務省反対)

263

0240

昭和 19 年 月 日 號

四. 比島作戰有利ニ進展スル場合. 戦果ヲ利用シテ
政略攻勢(終戦導入ノ企圖)ニ資スル為、帝國政府
聲明(案)ヲ班内ニ於テ研究一案ヲ得タリ.

0241

昭和 19 年 10 月 25 日 水 曜

機密 戦 日 誌

一 本日は支米空軍 B-29 約一口機 大村、長崎、佐保
 地を及清井島を襲撃せり。
 戦果撃墜六機、撃破七機、損害ハ大村ノミ
 一本早朝ヨリ GF 主力敵機動部隊トレガスピール東方
 海面ニ於テ接觸砲戦ヲ用裕シ先ツ二隻ヲ撃沈
 次ヲ追撃ヲ移リ名ニ北方ヨリ南下セル敵一群(廿三
 基幹)ト追撃中、敵反轉ノ為、合撃ノ態勢ト
 ナリ。夕刻ニ至ル迄細部ノ状況判明セズ。
 西統帥部共憂色溢シ作戰ノ前途 GFノ運命
 如何ト心痛甚シ
 第三遊撃隊ニ此日早曉「ミンダナオ海ヲ經テレイテ」

湾ニ突入セルモ敵艦隊ノ急襲ヲ受ケ
多大ノ損害ヲ生シテ後退セリ

北方ヨリルソン島東方海面ニ南下セル我カ機動部隊
本部ハ敵空母群ノ牽制ニ成功セルモノ如シ

刻迄ニ所ノ獲得セル戦果 A 四 C 二 D 一撃沈

三十五時ヨリ第三十五回最高戦争指導会議ヲ開催シ

対重慶工作ニ関スル幹事研究案ヲ検討シ左如ク
決定ス(別紙)

ト軍事顧問ヲ責任者トス

乙 陳公博ヲ速カニ招致シ汪ノ遺言(奮和年)ヲ聴取セシム
尚所矢崎中將ヲ總理大臣ノ命ヲ受ケテヤルコトヲ陸軍大臣
諒承本件ヲ現地軍ニモ通牒スルコトセラル

昭和 19 年 月 日 曜

機密 戦 争 日 誌

更ニ局長ヨリ作戰有利ニ進展スル場合ノ政府聲明
ニ関シ研究中ニ旨發言セリ。
總理ヨリ中立國利用ハ特激使派遣ノ件發言セリ
外務大臣反對セリ。

265

0244

昭和 19 年 10 月 26 日 木

一 本日杉田大佐ヨリ比島状況報告アリテ作戦遂次

好轉シツ、アリ

GH 之相當損害ハ度ケルニ敵トノ離脱ニ成功セリト

二 帝國政府聲明 閣スル幹事補佐會議ヲ行フ。

全員異存ナク外務省ニ於テ、細部ヲ研究スルコトトス。

三 大陸鉄道ノ再編成並ニ確保対策ニ関シ十課ノ説明アリ。

四 昨日發表セル戦果ノ外本日迄ニ判明セル戦果、

海空戦ニ依ルモノ

A 一ニ撃沈、A 四撃破、

ライテ湾ニ於ケル戦果、

丁 五撃沈、二英上、四擱坐、二撃破、

A 三撃破、B 一擱坐、B 二撃破、

0245

昭和 19 年 月 日 曜

機密 戦 日誌

C 撃沈 三 撃破 D 一 撃沈 三 撃破
大型上陸用舟艇 一七 撃沈 撃破 炎上 二
我損害

戦艦一沈没、一中破 若干未帰還機アリ。

五、比島方面戦況ニ鑑ミ、挺進第三、第四聯隊ニ動員

下令セラレ

第三聯隊ハ本日、第四聯隊ハ三十日佐世保ヲ出發ス筈
部隊精銳ニシテ意氣天ヲ衝ス

六、ト号部隊中、萬艘隊(七機)双軽(八機)ハ二十三日
富嶽(三機)ヲ六七(八機)ニ發シ、本日夫々出發セリ。

必死必殺部隊ニシテ是等若人ノ純忠ハ必スヤ敵
撃滅ノ快挙ヲ獲得スヘシ

「必死」謂フハ易ノ行フハ難シ

國內ニ在リテ政治遊興ヲ事トセル文官首腦又以テ
如何トナスカ

七月一日現在保有船腹量(千屯以上)左ノ如シ

①貨 一三七隻 五五五五屯 ②貨 九四隻 三四三三屯

油 八〇〇〇 一三三〇〇 油 一四〇〇 一〇七〇〇

③貨 三五二隻 九七二五屯

油 三四〇〇 八五〇〇

右合計 九四四隻 二八三万屯

昭和19年10月27日 金 曜

機密 戦 争 日 誌

- 一本日部長會報ニ於テ總長ヨリ左ノ注意アリ
1. 戦況發表稍ナリ那過ル。作戰見透シ無キ場合ニ於ケル過早ナル發表ハ研究ヲ要ス
 2. 第ニ線部隊精力保持ノ為ニ補給ニ関シ更ニ研究ヲ要ス
 3. 上司對スル中間報告ヲ勵行スルヲ武功章ノ件
 4. 軍人遺家族ノ援護ニ関シハ無條件ニ依存心ヲ起サヌ様研究スルヲト
 5. 戒嚴令ノ適用ニ際シ口邊過ルヲ可トス
 6. 戦勝氣分ヲ絶対ニ戒メ他方面ノ戦備ヲ強化スルヲ要ス
- 二軍需省航空兵器總局原田少將ヨリ。航空兵器生産ノ隘路ニ周ルニ報告アリ

生産隘路、發動機ナリ。材料不足、勞務者不足。
航空機工場、波行等、原因ハ明瞭ナリ。航空自体カ
他カ本願ニテ、自ラ打開セントスルノ氣魄無キ。最モ遺憾
トスル所ナリ。
三、昨ヨリ重慶工作問題ニ関シ總理、矢崎最高顧問會見
ニ別紙ノ如ク指示セリ。
四、第五航空軍ハ成都周辺ニ進攻シ B-29 六〇機ヲ炎上
撃破スルノ大戦果ヲ擧ゲタリ。

0249

昭和 19 年 10 月 28 日 土 曜

機密 戦 争 日 誌

一九四四年十月二十六日最高戦争指導会議が開催シ

「液体燃料確保対策ニ関スル件」ヲ決定ス。

席上外務大臣ヨリ十月六日前後(戦況依リ)大東亞宣

言ノ趣旨ヲ敷衍シ我カ戦争目的ヲ明カシ我カ今後ノ

方針ヲ闡明トスル為帝國政府聲明ヲ發表致度ト、

發言アリタリ。次テ更ニ外務大臣ヨリ佛印問題

處理ノ緊要性ニ関シ提案アリ。

本件ニ関シハ梅津總長ヨリ趣旨ハ同意ナラモ軍事

上、準備完了ニアラザレバ現況ニ於テハ慎重研究ヲ要ス

(★旨説明アリ) 二午最高戦争指導會議事務當局、遠來会ヲ実施セリ。

昭和 19 年 10 月 29 日 日 曜

特記事項
ナシ

0251

昭和 19 年 10 月 30 日 月 曜

機密 戦 争 日 誌

一、「レイテ島」方面ニ於ケル彼我航空兵力ハ目下略々伯仲
シテ、今後ニ於ケル航空戦力ノ推移如何カ決戦ノ
運命ヲ決定ス

海軍特別攻撃隊ハ27日「レイテ」湾ニ於テB一、C一
大破セリ。

同29日ハ四ヲ攻撃シA一隻炎上、他ニ隻ヲ炎上セリ。

二、二十八日迄ニ陸軍航空ノ得タル戦果左ノ如シ。

- T 六三隻 (撃沈、炎上、撃破ヲ含ム)
 - D 一〇隻
 - C 三隻
 - B 若クハ C 二隻
 - B 二隻
- 撃沈破

昭和 19 年 10 月 31 日 火 曜

- 一、十四時三十分最高會議幹事ニ於テ聲明問題及佛印問題ヲ研究シ左ノ如ク意見一致ス。
1. 聲明 六日ニ大東亞宣言ヲ追憶スル主旨トス
2. 佛印問題 決定時機ニ延期ス(趣旨ニ異存ナシ)
- ニ、次長比島出張報告要旨
1. 16 師団ノ戦力ハ現在ニ二分ニ程度ナリ。
2. 航空勢力ハ彼我伯仲シアリ。決戦ハ今後ニアリ。
3. 比島ニ於ケル陸軍ノ通信極メテ不良ナリ(海軍ニ可)
4. 98st 目下再建中ナリ。7st 以上月中訓練ス(海軍航空骨幹ナリ)
5. 第一師團ノ出張遅延ノ原因ハ一ハ軍旗ヲ飛行機ニ依リ護送シ到着遅レルタル為ナラン。
- 三、レイテ島ニ對スル増援兵力ハ既ニ五大隊半到着シアリ。

0253

昭和 19 年 月 日 曜

機密 戦 争 日 誌

第一師團 本夜マニラヲ出帆ス

四 桂林作戰ニヨリ攻撃ヲ開始ス

同作戰全縣於テ機用車 60 輛貨車 553 輛ヲ捕獲セリ

五 近ノ陸軍司令員 8 機 爆撃 16 機ヲ以テサイパンノ

攻撃ヲ企図シアリ

六 十月中陸軍関係新鋭機ノ生産状況左ノ如シ

キ 84	三〇一機
キ 67	六一機
キ 43	九〇機
キ 41	八〇機

昭和 19 年 月 日 曜

七. 本月末ニ於ケル捷吾團係ノ飛行機狀況左ノ如シ

陸軍

保有四〇機、内整備完了シタルニ五六機、出勤可能ニ一七機、
海軍

出勤可能ハ九七機程度ナリ。

概観シ全出勤可能ハ二〇〇機程度ナリ。

0255